

# 「一歩ずつ」



佐々木瑞生  
日本学校農業クラブ東北連盟大会  
家畜審査競技会 肉用牛の部  
優秀賞1席

**マ** れまで、部活動でも大きな大会で上位入賞したことはありません。東北大会という大舞台で、自分が2位になれるとは思っていませんでした。本当にうれいす」と喜ぶ佐々木君。

東北6県の農業系高校の生徒が学習の成果を発表する日本学校農業クラブ東北連盟大会は8月25、26の両日、岩手県花巻市を主会場に開かれ、家畜審査競技会肉用牛の部で第2位に当たる優秀賞1席に入賞した。

審査競技会は、肉用牛(※黒毛和種)審査技術の高さを競うもので、体型審査結果を点数化し、合計得点の高さで競われる。審査するのは「種牛(経産牛)」「幼畜(雌仔牛・生後10カ月以内)」の2種類。それぞれ4頭ずつを、種牛20分、幼畜10分の制限時間内で審査する。審査する項目は、種牛が全体体型と部位3カ所、幼畜は全体体型となる。

**東** 北大会になれば、自分より実力のある人がたくさんいるはず。大会では、落ち着いて自分の審査をすることを目標にしていた。

競技は種牛の審査から始まった。「審査項目が多い分、幼畜より種牛に苦手意識がありました」と話す、程よい緊張感の中、初の大舞台にも臆することなく、自身のペースで審査した。部位の審査で多少迷ったが、無事に競技を終えた。

一つ目で流れをつかみ、幼畜は納得のいく審査ができた。競技終了後

「奨励賞(6位以内)は行ける」と手ごたえを感じていた。

**運** 命の結果発表。審査委員長から評価が高い牛を順番に紹介される。ここで自分の審査の間違いに気付いた。入賞は6位から発表される。3位まで自分の名前が呼ばれなかった。「やっぱり東北大会は甘くないな。入賞は無理だったか」と諦めた瞬間、自分の名前が読み上げられた。

「えっ」。

一瞬驚いた後、佐々木君は満面の笑みを浮かべた。登米総合産業高農場部長の高橋建一先生は「本人は予想外の好結果だと思っていたようですが、見極めの地力がある生徒。何より、入学当時から勉強や実習に熱心でした。また、何にも真摯に取り組み、こつこつと努力していました。登米市は東北随一の和牛王国。登米の風土に育まれたことも大きい。この結果は当然」と言い切る。

佐々木君は「牛の審査や世話を、ゼロから教えてくれた市内の畜産農家の皆さん、先生方や共に頑張る仲間がいたから入賞できました」と感謝の気持ちを口にす。

**幼** い頃から、両親や祖父母を手伝い、牛の世話をしていた。「世話は苦ではありませんでした。牛は毎日餌を与えたり、ブラッシングをしたりしているとなついくれます。なつかれるとよいかわいくなるんです

よね」とっこり。

将来、自分が進む道は農業だと決意したのは中学時代。進学先は登米総合産業高農業科と決めていた。

高校入学直後から、放課後はほぼ毎日牛舎に通い、給餌、引き回し、ブラッシングや洗浄などを積極的にこなしている。「仕事がいねいなので、安心して任せられます」と高橋先生は目を細める。

牛の世話だけではなく、勉強にも積極的に取り組んでいる。「農業経営は、思っていたより覚えなければならぬことがたくさんあります。しっかりと勉強しないと付いていけなくなるので」と笑う。

**卒** 業後の進路は、即就農ではなく、企業などへの就職を考えている。「いち早く畜産をしたいのですが、やるからには専業で考えたいです。専業農家になるには、施設などを整えなければならぬので、お金が必要。そのためにも、就職して資金を貯めたいと考えています」と先を見据える。

「農業経営の前に、別な世界で勉強したい気持ちもあります。一人前の社会人となるため、礼儀、人付き合いや経営など、いろいろなものを吸収し、人として成長したいですね」

「牛の歩みも千里」。こつこつ努力し続けられれば、やがて大きな成果を得られる。佐々木君の歩みの先には、畜産農家への道が待っている。

※黒毛和種：肉牛としては最も多く飼育されている品種。毛色は褐色がかった黒色で、肉質と脂肪交雑は世界最高。外国からも注目されている。